



御嵩町

戦国最強の武将

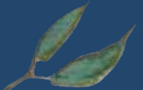
可児才蔵

KANI SAIZO  
THE STRONGEST  
SAMURAI OF THE  
SENGOKU PERIOD

「太平記三十六番相撲 第廿八之番ヒ 可児才蔵」(部分) 都立中央図書館特別文庫室所蔵



発行 御嵩町 〒505-0192 岐阜県可児郡御嵩町御嵩 1239 番地 1  
TEL 0574-67-2111 <http://www.town.mitake.gifu.jp>



KANI SAIZO THE STRONGEST  
SAMURAI OF THE SENGOKU PERIOD

戦国最強の武将

## 可児才蔵



広島県の才蔵寺にある  
可児才蔵像

可児才蔵は、御嵩町出身と伝えられている武将です。戦国時代から江戸時代初期にかけて活躍しました。天下分け目の関ヶ原の戦いでは、福島正則の軍の先鋒隊長を務め、徳川家康から「笹の才蔵」の通り名を与えられました。（注1）そんな才蔵は、正則に召し抱えられるまでは主君に恵まれず、明智光秀、前田利家、羽柴秀次など、次々に仕官先を変えていたと伝えられています。彼らの下で戦場を渡り歩いてきた才蔵の活躍と武勇は、当時の人々の間にも伝わっていたようで、多くの逸話が全国各地に残っています。しかし、才蔵の全容を明らかにできる史料はまだ見つかっていないため、その生涯は謎に包まれています。

### ◆ 可児才蔵生誕の地 御嵩町

才蔵の出生については、御嵩町の古刹・願興寺に伝わる『大寺記』に、次のように記されています。

「越前（現在の北陸地方）で朝倉義景が滅ぼされた時、1人の身重の側室が逃げ出し、放浪の末に願興寺にたどり着き、隠れ住むことになりました。やがて男の子が生まれましたが、名字を朝倉にすることを避け、可児大寺（願興寺の別名）にちなんで可児太郎と名付け、側室は宝淵宗珠と名乗りました。その後も2人は願興寺で暮らしていましたが、太郎は7歳ごろになると越前へ出て行き、可児才蔵と名乗りました」

これによると、才蔵は、越前の守護であった朝倉氏の子孫ということになります。（注2）また、可児という名字が、可児郡から発祥したということからも、才蔵と御嵩町の間には深い関係があると考えられています。（注3）

注1：森長可が「笹の才蔵」の通り名を与えたという説もあります。

注2：義景の子とすると、多くの逸話に矛盾が生じます。

注3：才蔵の出生は尾張国（美濃国）葉栗郡という説もあります。

御嵩町の古刹・願興寺

### ◆ 才蔵の遍歴

明智光秀との関わり

願興寺を出た才蔵は、戦場を求め、諸国を流浪していたようです。『御嵩町史 通史編』によると、時期は不明ですが、才蔵は明智光秀に仕えていて、本能寺の変では、光秀に従って本能寺を攻めたと記されています。その他に、本能寺で敵将の首を取り損ねた者に対し、手本を見せて取り方を教えたと記されている文献もあります。

前田家での活躍

才蔵は、前田利家に仕えていた時期もあったようです。末森城の戦いに参戦したとき、城将の奥村永福が矢倉から命令を出し、息子の榮明が裏門から出て敵と戦っていると、敵将、佐々勝五郎が榮明を見つけて戦い始めました。利家は榮明を助けるように命令し、才蔵はすぐに勝五郎と戦い始めましたが、槍の柄が折れてしまいました。そこで永福が上から代わり

才蔵の気骨「雨降りの傘也」

『小牧陣始末記』には、才蔵が羽柴秀次に仕えていた時期の逸話が記されています。

秀次が長久手の戦いで敗走し、馬を見失って徒歩で逃げていたところへ、馬に乗った才蔵が通りかかりました。そこで秀次は馬を貸すように命じましたが、才蔵は「雨降りの傘也（雨の日に傘を貸す人などいない）」と言い放ち、走り去ってしまいました。戦場で敗走するときは、身分の上下など関係ないという信念が才蔵にはあったのでしょう。主君にも馬を貸さなかったというこの逸話は、才蔵の気骨を感じさせるものです。しかし、秀次にしてみれば見逃すことのできない反逆行為。才蔵は、この一件を知った羽柴秀吉に叱られ、秀次の下を去り、日陰者になっ

福島正則との出会い

『名将言行録』には、才蔵が日陰者になっていたとき、噂を聞いた福島正則が、才蔵を700石で召し抱えたと記されています（このときに才蔵は、半分の350石を家来の竹内久右衛門に分け与えたと伝えられています）。

正則にお目通りした時、得意なことについて聞かれた才蔵は「長年の修練の結果、自分で髪を結ぶことが上手にできるようになりました」と答えました。これ聞いた正則の家来たちは、才蔵はうつけ者かひねくれ者ではないかとささやきました。しかし正則は「後ろに目がなければ、自分で髪を結ぶことは難しい。それが上手にできるということは、目の前のことなら何でもたやすくできるのだらう」と言いました。正則は才蔵の能力をしっかりと見抜いていたといえます。





### 三 関ヶ原の戦い

才藏は、福島正則に従って関ヶ原の戦いに参戦し、その活躍に感嘆した徳川家康から「笹の才藏」の通り名を与えられました。『名将言行録』『石田軍記』『黒田家譜』から、その前後の逸話も含めて紹介します。

本戦前、正則が才藏と若侍を使い出すと、若侍は竹束（竹を束ねた防具）の外側を通って行くと言いましたが、才藏は弓矢や鉄砲を避けるために同行はせず、竹束の内側を通って行きました。やがて若侍は命からがら目的地に着き、才藏は何事もなく目的地に着きました。その帰り道、若侍は才藏の判断が正しく、自分は命拾いをしたと言いました。すると才藏は「大事な任務を終えずに死ぬわけにはいかなかった。しかし任務を終えた今は、死んでも惜しくはない」と言い、竹束の外側を通って帰りました。しかし若侍にはもうその勇気は残っていませんでした。

家康が到着するまでの間、正則たちは勝手な行動を禁じられていました。ところがある日、正則の陣に近づいた敵将を、



「関ヶ原合戦図屏風」関ヶ原歴史民俗資料館所蔵



才藏が勝手に討ち取ってしまいます。これに怒った正則は才藏に謹慎を命じました。しかし才藏は、翌日から笹の枝を背中に立てて密かに戦いに出かけ、首を取ると耳や鼻に笹の葉を入れてその場に捨て、また密かに帰っていました。

本戦の先陣は福島隊。才藏がその隊長でした。しかし、直前になって味方の井伊直政と松平忠吉が先頭に出てきました。才藏が「先陣をきるのは福島隊なので、この先は通せんません」と制すと、直政は「家康様の命令です。偵察に行く間だけ通しなさい」と言ったので、才藏は「偵察なら主力は残して行ってください」と言い、その結果、直政たちはたった300人ほどの兵を率いて進むことになりました。

関ヶ原の戦いの後、首実検が行われました。そこで才藏は、謹慎中も戦っていたことを話しました。正則は怒りましたが、全ての首を確認した結果、17人の首から笹の葉が見つかりました。（注4）これを知った家康は感嘆し、才藏に「笹の才藏」の通り名を与えました。なお、この一件で才藏は家康の印象に残ったよううで、家康は正則に会うと、才藏の無事を尋ねていたと伝えられています。

### 四 才藏と福島正則の関係

才藏に関する逸話の中には、福島正則が登場するものが多く、その行動や発言から、お互いの関係を感じることができま



一

ある日、正則は日のあたる石垣に、十文字槍が置かれているのを見つけました。日があたっては槍に良くないと

思い、日陰へ置き直そうとしましたが、ふと鞘を抜いて見ると、赤く錆びていたため、（持ち主が手入れをしていないことを）怒って放り投げました。そこへ才藏が現れ、正則に自分の槍を放り投げた理由を聞くと、才藏は「槍先をご覧ください。槍は先で突くものです」と言い、槍を拾って正則に渡しました。



才藏が使用したとされる十文字槍

二

才藏は広島城の門番を夜通し勤めていましたが、年をとってからは、休憩中は寝転んで仮眠を取っていました。すると、そこへ正則に仕えている小坊主が来て、正則からの贈り物として、才藏にうずらを手渡しました。すると才藏は慌てて起き上がり、はかまをはき、本丸の方へ向かってうずらを受け取り、お礼の言葉を述べました。そして小坊主に向かい、寝転んでいる自分に対して、正則からの贈り物があることを伝えるということは、正則に対して大変失礼なことだと言っ

て、厳しく叱りました。この話を聞いた正則は「全ての家来に才藏のような心を持って欲しい。そうすれば、どんな事も私の思い通りにできるだろう」と言いました。

### 五 才藏の槍



才藏が宝蔵院流槍術を習得するまでの経緯が『甲子夜話』に記されています。

ある日、才藏は奈良にある興福寺の宝蔵院を訪ねました。そこで槍術について聞きましたが、戦場で槍の使い方を覚え

た才藏には、槍術の理屈が分からず、正則の許しを得て宝蔵院で修行を始めました。しかし、修行後の戦いでは、かえって恐怖心が芽生えてしまいました。才藏は再び宝蔵院を訪ね、このことを話すと、まだ半分しか学べていないからだと言われました。そこで才藏は更に修行を重ね、遂に宝蔵院流槍術を習得し、正則のもとへ戻りました。これ以降、才藏は、敵の槍道をはつきりと観ることができるようになりました。

注4：20人の首という説もあります。

## 六 衰えを知らぬ才藏

戦場以外でも才藏は勇ましく、気骨のある振る舞いをしていました。年をとっても衰えなかったその様子は『名将言行録』によって伝えられています。

ある日、才藏に試合を申し込んだ者がいました。すると才藏は、甲冑を着け、その背中に笹の枝を差し、鉄砲を持った家来を10人連れて現れました。驚いた相手が「私は一対一の槍試合のつもりです」と言うと、才藏は笑って「私の試合はいつもこのとおりです」と言いました。才藏にとっては、実戦を想定していない「試合」など意味のないものだったのでしょう。

福島正則の身内の加兵衛という者が「才藏様は若いころは凄かったそうですが、今では刀を腰に帯びることもできず、家来に持たせているご様子。そのお手並み、拝見したいものです」と言いました。才藏は若いころは長太刀の使い手でしたが、年をとってからは刀を

家来に持たせていたのです。すると才藏は「これはお恥ずかしい。若いころはこの刀で試合をしていましたので、名残惜しくて家来に持たせていました。しかし武芸の方は、よそ目には分かりにくいので、今ご覧に入れます」と言っ

て立ち上がり、そばに置いてあった刀を取ると「これが長太刀の技です」と言っ

て刀を抜き、加兵衛の首を落としてしま

いました。若侍たちが集まって話をしていた時「どれほど凄い人も、年をとったらそうではない。心は勇ましくても、若いころとは違う」と言ったのを聞いた才藏は「年寄りも人による」と言いました。更に若侍たちが「どれほど強い者も、手足が弱ってしまつては何もできない」と言う

うと、才藏は「いやいや、人による」と言

いました。才藏は年をとっても甲冑と

武器を身に着け、馬に乗って走り回り、

若侍と戦つても負けることはありません

でした。

## 七 才藏の最期

晩年、才藏は才入に改名して、仏門に入ると、広島城の東にある矢賀山に所有していた山荘・竹葉軒の跡に、才藏寺を建てました（矢賀山からは広島城を眺めることができます）。

『翁草』には、才藏の最期が記されています。軍神・愛宕権現を信仰していた才藏は、自分がその縁日に死ぬことを予言していました。そして予言どおり、縁日にあたる6月24日に身を清め、甲冑と薙刀を身に着けた才藏は、椅子に座ったまま息絶えました。才藏の墓標は、矢賀山の麓、通称「才藏峠」の脇に建てられました。心ある武士は馬を下り、水を供え、花を手向けたと伝えられています。



才藏の墓標（才藏寺）

## 八 民話「可児才藏のみそ合戦」

才藏の武勇の中には、半ば伝説ともいえるような民間伝承に姿を変え、現代に伝わっているものもあります。

「福島正則が、広島城の石垣を無断で改修した罪を問われ、広島から追われることになったとき、納得ができなかった才藏は、数十人の家来と共に（広島城の近くの）小さな城に立てこまりました。やがて広島城にやって来た新城主・浅野長晟がこの城を攻めると、才藏たちは熱いみそ汁を浴びせかけて戦いました。次に長晟が才藏たちを兵糧攻めにする

と、才藏たちは周辺の人々に、『城山のお地蔵様に笹の葉を供え、そこにみそと米を乗せると願いが叶う』という噂を流しました。するとみそと米が次々と集まり、才藏たちは戦い続けることができました」という民話

が広島市に伝えられています。この民話に出てくるお地蔵さまは、今も才藏寺に置かれていて「ミソ地蔵」と呼ばれています。みそは「脳みそ」を連想させるため、今では多くの受験生が参拝し、みそを供えて合格を祈願しています。

## 九 笹野才藏人形

九州北部には、夜に窓から忍び込むようにした曲者を才藏が切り捨てたら、それは疱瘡神（天然痘の神）だったので、その後、才藏を描いた紙を門に貼ると、天然痘にかからなかったという言い伝えがあります。『笹野才藏人形』は、この才藏を人形にしたもので、若い男前の才藏は、派手な着物を着て、愛宕権現の使いである猿を連れています。



笹野才藏人形  
（津屋崎人形巧房）

最後に・・・

竹ナラハ 刻テモ見セン  
直ノ外ニ 節モヨモナシ

これは、才藏が『誓文日記』に書き留めた、生涯で唯一の短歌です。天真爛漫で竹を割ったような性格は、これまでに紹介した才藏の活躍と武勇からもうかがうことができます。今回は、全国各地に残っている才藏の逸話を集め、このような形にまとめました。この冊子を手にとられたみなさんが、戦国最強の武将・可児才藏の魅力を発見していただければ幸いです。

### 【参考文献】

- ・石川県編『石川県史』石川県、1939年
- ・可児町編『可児町史』可児町、1980年
- ・万造寺竜著『旅の伝説玩具』旅行界発行所、1936年
- ・中里介山著『日本武術神妙記』大菩薩峠刊行会、1941年
- ・小山栄達等編『日本武勇談』興文社、1928年
- ・桜樹山人著『武士の鏡』川流堂、1903年
- ・金子空軒、北村台水編『武人百話』帝国軍事協会出版部、1912年
- ・御嵩町史編さん室編『御嵩町史』御嵩町、1992年